

〈書評〉

Paul Guyer

*Reason and Experience in Mendelssohn and Kant*

(Oxford University Press, 2020)

後藤 正英

本書は、ポール・ガイヤーが、カントとメンデルスゾーンの哲学を、経験論と合理論の総合という共通の課題に対して、それぞれ独自の立場からアプローチしたものとして読解した労作である。特にガイヤーは、メンデルスゾーンが、思弁的観念論だけではなく豊かな経験的洞察をもつ哲学者であった点を強調し、これをメンデルスゾーンのオリジナリティとして理解する。本書は、カント哲学の一方的優位のもとに議論を展開するのではなく、メンデルスゾーンの哲学がもつ独自性を明らかにしている。一方、カント哲学についても、知や信に関わる合理的構造の解明において永続的な価値をもつ仕事をおこなったとの評価がおこなわれている。

過去4半世紀ほど、欧米ではメンデルスゾーンに関する多数の研究書が刊行され、その再評価が進んだ(比較的近いところでは、Michah Gottlieb や Elias Sacks など)。その背景には、排外主義や学問軽視の風潮が強まる中でメンデルスゾーンの啓蒙思想の意義が再考されたことがある。しかしながら、これまでは、広い意味でのユダヤ学関連の研究者による再評価が中心であった。本書は、代表的なカント研究者による研究である点が注目に値する。カントとメンデルスゾーンの対論における論点を、認識論、形而上学、美学、宗教論、政治論の全般にわたって分析した著作は、過去の研究史においても稀であるといえるだろう。

全体の構成は以下の通りである。まず「プロローグ」では、懸賞論文をめぐって、カントとメンデルスゾーンの経験論と合理論に関する立場が論じられる。第一部は「形而上学と認識論」をテーマとしており、その内部は、第2章「メンデルスゾーン、カント、カントの前批判期における神の存在証明」、第3章「『純粹理性批判』と『朝の時間』における神の存在証明」、第4章「メンデルスゾーンとカント、魂の不死をめぐって」、第5章「メンデルスゾーン、カント、観念論」という章構成になっている。第二部では美学がテーマとなり、メンデルスゾーンとカントの特徴の違いが論じられる。最後の第三部では宗教と政治と歴史がテーマとなる。その内容は、第9章「メンデルスゾーン、カント、啓蒙」、第10章「メンデルスゾーンとカントにおける宗教の自由」、第11章「ユダヤ教、キリスト教、純粹理性の宗教」、第12章「メンデルスゾーン、カント、進歩の可能性」から構成されている。

評者の関心は、特に第三部にあるので、後でその点を詳しく検討する予定であるが、その前に第一部と第二部の議論についても、少し紹介しておきたい。

第一部の2-3章では、初期においてはカントとメンデルスゾーンは経験論と合理論の双方の観点から神の存在を論証しようとする共通点をもっていたが、その後、次第に立場を異にするようになった過程が追跡されている。第四章では、魂の不死の論証への立場の違いにもかかわらず、カントはメンデルスゾーンの議論を実践の文脈に置き換えつつ継承している面があることが述べられる。さらに、カントは、後年になると、個人の魂の不死を強調しなくなったが、それが『宗教論』での自由概念と関連していることが指摘される。この点は、第三部で進歩の問題を論じる

際に再度取り上げられている。第5章では、メンデルスゾーンは感覚的経験に基づいて外的対象の存在を蓋然的に肯定するにとどまっており、超越論的根拠に基づいて対象を肯定しようとするカントと比較した場合、メンデルスゾーンの立場を、合理主義者というよりは純粋な経験論者と呼ぶことができるかもしれない、との解釈が示されている。(p.168)

続く第二部では、メンデルスゾーンについて、現実の美的経験の多様性に即して合理論と健全な経験論を結合した人物であったとの評価がおこなわれている。(p.204)メンデルスゾーンはカントほどには趣味判断における一致に関心を向けておらず、感情と理性の区別もカントほどに厳密ではない。しかし、ガイヤーによれば、これは芸術経験における現実の在り方を直視したゆえともいえるのである。

ここからは、第三部の、特に10-12章の議論を紹介したい。第10章「メンデルスゾーンとカントにおける宗教の自由」では、カントとメンデルスゾーンの議論をジョン・ロックの宗教的寛容論の系譜の中に位置づけて、相互の関係を明らかにしている。カントもメンデルスゾーンも、ロックの寛容論に明示的に言及することは少ないわけだが、問題としてどうつながっているのかを解明している点で、本論の分析は貴重である。

教会と国家を厳格に分離するカントは、両者の関係について完全性を目指すパートナーとして考えるメンデルスゾーンよりも、ロックに近い立場にある。カントは、メンデルスゾーンやロックと同じく、宗教における強制を厳しく批判する。ガイヤーによれば、カントは、この批判については、メンデルスゾーンよりも、さらに徹底した理論的基礎付けをおこなっている。しかし、ガイヤーは、宗教の多様性については、カントよりもメンデルスゾーンの方が深い理解をもって指摘する。ここで前提となってくるのは人類の進歩に関する議論である。メンデルスゾーンは、個々人には発展の様々なリズムとスケールがあるので、一律な形での進歩論は展開できないと考えている。個人の学習の多様性と宗教の多様性はメンデルスゾーンにおいて密接に関連している。つまり、宗教には、それぞれに固有の発展があり、諸宗教の間で優劣を論じることはできないのである。カントが、歴史的宗教の多様性を、将来、純粋な道徳宗教に取って代わられるものと考えたのに対して、メンデルスゾーンは宗教が多様であること自体を賞賛した。

第11章「ユダヤ教、キリスト教、純粋理性の宗教」の議論に移ろう。ガイヤーによれば、カントは、キリスト教が道徳の根本概念を表現するのに特権的な地位をもっていると考えており、この点は、それぞれの歴史的宗教はそれぞれの民族にとって必要不可欠であったと考えるメンデルスゾーンと対照的である。そして、カントにおいては、全ての歴史的宗教や教会信仰は将来的に解消されるものとして展望されていたのである。メンデルスゾーンはユダヤ教の基礎に理性宗教があることを主張したが、カントはこの点を認めなかった。カントは、ユダヤ教は純粋な宗教ではないと考えている。カントはキリスト教の儀礼や象徴がもつ道徳的意義を強調するが、これは、本来、メンデルスゾーンがユダヤ教の場合におこなっていることと類比的である。

ガイヤーは、宗教の多様性の説明としては、カントの合理主義よりもメンデルスゾーンの経験主義の方に説得力があると考えている。現代世界では、一方で歴史的宗教が存続しつつ、他方では宗教の個人化も進行しているわけだが、カントとメンデルスゾーンの説明のどちらが有効なのか。本章を通して、そんな問題を考えることもできるだろう。

最後の第12章「メンデルスゾーン、カント、進歩の可能性」では、進歩概念に関するメンデルスゾーンとカントの理解が比較される。メンデルスゾーンは『エルサレム』において、レッシングの

『人類の教育』を引き合いに出しながら、経験が教えるところでは、道徳について、個人としての進歩はあっても、類としての進歩はなく、行きつ戻りつ、同じ範囲を揺動しているだけであると主張した。カントは『理論と実践』において、メンデルスゾーンの主張を人類に対する悲観主義として批判したが、普通に思われている以上に両者は接近している、というのがガイヤーの解釈である。『エルサレム』の当該箇所での議論は、アприオリな認識論ではなくて、経験論的なアプローチに基づいている。ガイヤーは、メンデルスゾーンは、人類が道徳において進歩する可能性自体を否定したわけではない、と解釈する。つまり、経験的には反証が多数存在するために、道徳の進歩に関して否定的発言をしただけなのだ、と。

ガイヤーによれば、カントも後年の歴史哲学関連の著作では多数の経験的説明を用いている。カントは道徳的進歩や永遠平和の可能性を論じたのであって、必然性を主張したのではない。それはメンデルスゾーンがこの点でアприオリな論証をしたわけではないのと同様である。

これに対して、本書を書評したエリアス・ザックスは、ガイヤーの指摘が興味深いものであることを指摘しつつも、メンデルスゾーンの著述から別の解釈を提示しうる部分を引用したうえで、次のように批判している。メンデルスゾーンは進歩を否定していない、と結論づけるとき、それは行きすぎであるように思われる。メンデルスゾーンは、経験論と合理論を総合しつつ、控えめな主張(進歩を経験的に証明できない)と、野心的な主張(進歩は不可能である)の両方を、人間の使命についてのアприオリな証明に基づきつつ、展開したのではないか。(Elias Sacks, *Kantian Review*, Volume 26, Issue 3, 2021, p.490)

この点に関連して私が気になるのは、進歩思想と魂の不死の関係である。評者は、以前から、ひたすらに来世を待ち望むのではなく現世志向が強まった18世紀において、なぜ「魂の不死」が盛んに論じられたのか、という点に問題関心を抱いてきた。メンデルスゾーンは、『フェードン』以来の魂の不死も前提にしているので、彼の経験的な悲観主義は必ずしも進歩の否定には直結しない、というのがガイヤーの解釈であった。カントは、進歩に関する経験的な反証を十分に認識しながら、歴史哲学の著作では、個人の魂の不死よりも世代間を通しての道徳的進歩を語るようになった。「魂の不死」は進歩思想とどう関係してくるのか。本章は、この問題を改めて考える契機となった。

※本論は JSPS 科研費(研究課題番号:20K00101)の助成を受けたものです。